

# 世紀転換期のホモエロティックな視点

——Henry Blake Fuller, *Bertram Cope's Year* から見える世界——

本 合 陽

## 結婚と年齢—序に代えて—

作家として最後の冒険を試みるかのように、Henry Blake Fuller (1857-1929) は 1919 年、*Bertram Cope's Year* を出版した。今まで十分に描くことのできなかつた同性への愛情を描こうとしたのだ。だが、その冒険的な挑戦は出版界にも読者にも受け入れられなかった。

作品の冒頭部分で、フラーは主人公の年齢設定にこだわっている。オペラにもなってヒットした George Du Maurier の小説 *Peter Ibbetson* (1892) の、28 歳で恋愛の夢に時間を止めてしまう主人公を引き合いに出し、主人公の年齢は、24 歳、もしくは 25 歳より一日でも若くなければならないと書く。デュ・モーリアの主人公のように、28 歳という二十代後半の年齢では「否定しようもなく男 (a man)」だ。しかし、24 歳なら、男性を理想化する乙女の目には「男盛り」と映っても、40 代、50 代の者にとっては、“friendly interest” を、“their sympathy and their longing admiration” を惹き起こす年齢である。この周到な年齢設定はどのような意味を持つのか。

この作品に直接的な答えを見出すことはできないが、別の作品から答えが見えてくる。*Harper's Weekly* に連載された *The Cliff-Dwellers* (1895) がそれである。フラーはイタリア旅行記の体裁をとるロマンスで小説家としてデビューした。ハーバード大教授の Charles Eliot Norton に評価され、その後リアリズム文学に傾倒していき、当時の文壇の大御所 William Dean Howells にも認められ、Hamlin Garland とは友人として互いに触発しあい、シカゴ・ルネッサンスの作家たちとも交友関係を結ぶなど、19 世紀末から 20

世紀初頭にかけてシカゴを拠点に活躍した。*The Cliff-Dwellers* は、彼がリアリズムに転向した最初の作品である。

*The Cliff-Dwellers* は、シカゴの高層アパートで働く人々の、欲望渦巻く世界を描く作品だが、実は結婚の失敗が大きなテーマである。その主人公の年齢が 25 歳なのだ。冒頭に述べたように、*Bertram Cope's Year* は男同士の愛がテーマであるが、24 歳という、結婚を意識せざるを得ない主人公の年齢設定がそのテーマに関わっている。

*Intimate Matters: A History of Sexuality in America* を著した John D'Emilio と Estelle B. Freedman によれば、性的なアイデンティティという概念は、20 世紀の中盤以降、きわめて重要になる (D'Emilio xi-xii)。性的なアイデンティティを意識しだす年齢という観点で考えると、思春期は重要だ。同性愛を扱う作品で言えば、例えば、Truman Capote は *Other Voices, Other Rooms* (1948) で、ゲイである自分の発見の物語を描いた。主人公 Joel Knox は 14 歳である。James Baldwin の *Giovanni's Room* (1956) で、主人公 David が初めて男性との関係を持つのもティーンズである。つまり、ホモセクシュアリティという言葉が、そして、それを定義づける概念が確立した現代では、セクシュアリティを自らのアイデンティティとして明確に意識し始める年齢が重要なのだ。これはセクシュアリティという概念が支配的であるからこそ生じうる現象であろう。アイデンティティとしてのセクシュアリティという概念が発達していない時代には、自ずと別の現象が存在したはずだ。

ホモセクシュアリティという言葉が最初に用いられたのは 1869 年であるとされるが (Miller 13)、セクシュアリティという概念が、ホモセクシュアルとヘテロセクシュアルという二分法として広まったのは 20 世紀もだいぶ経った頃からだろう<sup>1)</sup>。それ故、19 世紀末を舞台に描かれる *Bertram Cope's Year* の世界において、今述べた意味でのセクシュアリティの目覚めを重要視する必要はないであろう。ただし、少なくとも発表された 1919 年の時点では、女性的な男性といった、ジェンダーの観点から見た類型としてのホモ

セクシュアルは存在していた (Chauncey 13)。従って本論では、同性への性的な意味を含めた愛情を、現在用いられる「ホモセクシュアル」という言葉ではなく、「ホモエロティックな欲望」、もしくは、対象への「ホモエロティックな視線」という言葉で表現する。そして、自分の中に存在するホモエロティシズムを外の世界に向かって示す必要性は、結婚という、社会のシステムに組み込まれる状況に身を置くとときに初めて生じるのである。

*Bertram Cope's Year* は、今述べた結婚とホモエロティシズムの結びつきを、非常に暗示的に描く作品である。以下詳細に、その文学的な暗示を分析していく。その分析が作品の再評価につながるだけでなく、作品の持つ意味を考える機会を与えてくれるはずだ。

### ***Bertram Cope's Year* と「欲望の三角形」**

最初に作品の粗筋を紹介したい。

Bertram Cope は講師として働く傍ら、学位に向けて研究を開始する。ある大学関係者のパーティで、まず Medora T. Phillips という 40 がらみの未亡人、次いで 50 歳くらいの美術収集家の独身男性 Basil Randolph、そして夫人の家に下宿している 20 歳くらいの Amy という女性と知り合う。夫人の家に招待され、さらに二人の若い女性、Hortense と Carolayne を知る。バートラムはそのときの様子を友人 Arthur Lemoyne に書き送る。いくつかの章は、アーサーに宛てた手紙形式になっている。

バートラムに関心を抱いたバジルは、彼のことを知ろうと努力する。彼を誘うために広いアパートへ引っ越しもする。一方、バートラムはこの町で知り合った全ての人と距離を保ちながら接しているが、ある事件をきっかけに、彼を英雄視するエイミーと婚約することになる。バジルはことのいきさつを、メドローラの家に住居する、目と足が不自由な 40 代後半の、これまた独身の男性 Joseph Foster から聞く。一方、クリスマス休暇で実家に戻ったバートラムは、アーサーの助けを借り婚約は一方的なものであると家族に釈明する。

業を煮やしたエイミーが他の男性と婚約すると、次に、ホーテンスがバートラムをねらう。大学町に来ることを渋っていたアーサーも、この一件を機にやって来て同居するようになる。アーサーはバートラムと違い、どこことなく仕草に女性的な感じのする男で、メドーラもバジルも彼が気に入らない。アーサーはバジルの好意で大学に職を見つけるが、もともと関心のあった演劇にのめりこんでいる。その公演で、演技自体は好評を博するものの、公演後、女性的な仕草で他の男性役者に接したことが元で、彼はこの町にいらなくなる。一方、ホーテンスに続き、キャロラインがバートラムに恋をする。

しばらくしてバートラムは学位を取得すると、メドーラやバジルなど世話になった人たちに挨拶することなく故郷へ戻る。近況を知らせる手紙がキャロライン宛に来る。それに対し、ジョゼフはバートラムを代表とする若い世代にもともと抱いていた不信感を表明し、その後バジルとメドーラが、バートラムのことを語り合う場面で話は終わる。

1987年、Kenneth Scambray が、従来語られてこなかったフラーの同性愛的傾向を論じる伝記を出し、*Bertram Cope's Year* は1998年に事実上の出版を見た。事実上と言ったのは、フラーはこの作品を仕上げた後、出版に向け奔走したが出版社が見つからず、やむなく自費出版するも全く売れなかったからだ。98年の出版に際し、*The New York Times Book Review* の評者 Joel Conarroe は、「よろい戸を押し上げ、魅力ある、そして不当にも無視されてきた comedy of bad manners を露わにできるのは喜びである」(Conarroe 13) と結び、この作品には現在発掘する価値があると見ているが、しかし、伝記作者を含めた従来 of 批評家は、この作品をあまり評価してこなかった。

先行する伝記作者たち、例えば、Bernard R. Brown, Jr. は *Henry B. Fuller of Chicago: The Ordeal of a Genteel Realist in Ungenteel America* (1974) の中で、ホモセクシュアリティが主題であるとした上で、それを扱うには十分に大胆とも言えず、それ以外に見るべきものはないとする (Brown 226)。Twayne のシリーズに収められた John Pilkington, Jr. の批評に至っては、

この作品にほんの2頁弱しか割かず、「性的異常が登場人物の人生に与える影響を適切に扱うのに失敗している」ために「成功しなかった作品だ」(Pilkington 151)と評している。また、アメリカにおける同性愛文学の歴史を書いた批評家の評価も高くない。現代になってゲイ・リーディングが始まったアメリカ同性愛文学史のごく初期のもの、*Playing the Game: The Homosexual Novel in America* (1977)の中でRoger Austenは、同性愛に関する対話を描いたEdward Prime-Stevensonの*Imre: A Memorandum* (1906)と比較し、退行であるとする(Austen 27)。1991年の*The Gay Novel in America*でJames Levinも、より赤裸々にホモセクシュアリティを描けなかったために、作品はつまらないものとなっていると書いている(Levin 16)。

しかし、翻ってもう一度、現在発掘するに値すると考えるコナローの言葉に注目したい。彼は、主人公のホモセクシュアルとしてのアイデンティティが特定されていないため、「バートラムの本質的な空白(blankness)に」「人々が自分自身の満足できない欲望を投影する」(Conarro 13)と述べ、赤裸々にホモセクシュアリティを描かないからこそ、この作品の魅力が生じうると考えている。私も主人公の、この触媒作用と呼べる役割を分析することにより、作品の魅力を見出せると思っている。一見混乱しているように見える語りの設定の背後に、しっかりとした作者/語り手の視線が存在しているのである<sup>2)</sup>。

一方、この作品を評価する人も、その数こそ多くはないが存在する<sup>3)</sup>。その中で、この作品に見られる象徴性を考えるとき、Carl Van Vechtenの次の言葉は適切だ。

I cannot, indeed, name another American writer who could have surveyed the ambiguous depths of the problem presented so thoroughly and at the same time so discreetly. [...] The story, apparently slow moving, really thrusts forward its emphatic movements on almost every page, but it would probably prove unreadable to one

who had no key to its meaning. Once its intention is grasped, however, it becomes one of the most brilliant and glowingly successful of this author's brief series of works. (Qtd. in Solomon 297)

ヴァン・ヴェクテンの言葉は後で振り返ることにするが、この作品が興味深いのは、直接的エロティックな要素を迂回する形で、しかし背後にエロティックなものを暗示する描き方がなされていることだ<sup>4)</sup>。しかし、この作品には、明らかに同性間の愛情を暗示する表現がある。もちろん、この作品を本当の意味で興味深くしているのは、バートラムを中心とした人間関係をめぐるホモエロティックな視線だが、それは後の議論として、一旦ここで、当時、同性愛的な要素を求めて読む読者にとって、強烈に暗示的である要素を幾つか指摘しておこう。後に述べる人間関係から見える暗示と、今から述べる言葉のレベルの暗示とが響きあい、作者のホモエロティックな視線が顕在化すると考えられるからである。

一つ目はサッフォーへの言及だ。初めてフィリップス夫人の家を訪れた後、バートラムはアーサーに宛てた手紙に、婦人の家での体験を、「レスボス島での午後のことであった。サッフォーと目の肥えた処女たちがいた。19歳の哀れな若者、パオーンがセンターテーブルの上のパンフレットや紙切りナイフを片付けていた」(23)と記す。女性同士の関係に同性愛を暗示するイメージを持ち込むことにより、一つには、バートラムがホモエロティックな視線を持つ可能性が暗示される。もう一つには、アーサーにその暗示的イメージを書き送る行為を描くことで、共にその暗示を共有する男性二人の関係を作者が設定している可能性が生じる。

次に挙げるのは“*uranian*”の暗示だ<sup>5)</sup>。エイミーとの婚約を解消し、「自由の身(a free man)」(210)になれたことを喜ぶバートラムとアーサーが家路につく場面、アーサーが「衝動的に腕をバートラムの肩に投げかけ」「これでもう大丈夫」と言うと、そのとき「一面星の散りばめられた夜空の中で、*Urania* がより幸せな家庭を思いやり深く見下ろしていた」(211)。この場合、

“Urania”はラテン語的に天文を司るミューズと捉えるべきかもしれないが、その裏には“Uranian”が潜んでいる。“Uranian (Urning)”とは、Karl Heinrich Ulrichsがドイツで1860年代に提唱した言葉である。彼はそれを、プラトン『饗宴』のPausaniasの議論から取り、同性愛を擁護するために用いた。彼の理論はアメリカでも1860年代に議論されており(Hogan 552)、20世紀の初頭にはヨーロッパ中に普及していた(Miller 14)。さらに、今述べた引用中、「より幸せな家庭」とはバートラムとアーサーの男性二人の家庭を示している。“Urania”に“Uranian”を読み込むことは可能だろう。

最後にもう一つ。作品中、当時の同性愛者の一つの典型とみなしうる独身男性、バジル・ランドルフ登場の場面の表現である。後に紹介するJamesの*The Bostonians*につながるので注目しておきたいのだが、この場面で、バジルは大学町にやってくる若者たち(“young fellows”)の内の何人かと「知り合いになること、親密な知り合いになること(knowing intimately)」(6-7)を楽しんできたとされている。例えば、前に挙げたD’EmillioとFreedmanがその著作のタイトルに用いたように、“intimacy”という言葉には、性的な関係をもてるような親密な関係という意味がある。また聖書の中で、男子同性愛行為を示す“sodomy”という言葉の基となったソドムの町のエピソードで、ソドムが神によって滅ぼされることになったのは、町の人々が天使を“know”しようとしたことにある。このエピソードは良く知られている。この二つの言葉がこういった文脈におかれた場合、バジルが男子大学生を“intimately”に“know”することに、性的なニュアンスを読むことができる。

今述べたように、この作品には、様々な男同士の間の欲望につながる暗示があるが、この作品では、様々な人間関係にこそホモエロティシズムの暗示が豊かである。もしくは関係を通して、作者のホモエロティックな視線が見えてくる。様々な関係の対比がこの作品では盛んに用いられる。そして往々にしてその関係が三角形をなしているのに気づくのである。その三角形をなす人間関係を考えるとき、やはり三角形を持ち込んで欲望を解明しようとした二人の先駆者について、簡単に触れておく必要があるだろう。「欲望の三角

形」を論じたルネ・ジラール、そして、ジラルールの考えを修正・援用して、「ホモソーシャル」な社会構造を論じた Eve Kosofsky Sedgwick である。

セジウィックは、「エロティックな三角形におけるライバル同士の絆は、愛される対象と愛する主体が結ぶいかなる絆よりも、行為や選択をより強くより深く決定する要素であるとジラールは見ているようだ」(Sedgwick, *Between Men* 21) と述べる。セジウィックの理解に間違いはないが、ジラール自身の言葉に沿ってもう少し補足しよう。まず、ジラールは、「直線的に見える欲望の上には、主体と対象に同時に光を放射している媒体が存在する」(ジラール 2) とし、それを表すのにふさわしい表現が三角形であるとした上で、主体と媒体との関係こそが重要であると述べる。つまり、「欲望する主体」と「欲望される対象」の関係には、往々にして「主体」とライバル関係にある「媒体」が存在し、その三角形において、「主体」と「対象」との関係よりもむしろ「主体」と「媒体」との関係が重要であると論じているのである。ジラールは様々な形の欲望の背後にこの三角形が見られるとするが、彼の論点で一番重要なのは、「対象」への欲望はアプリオリに存在するのではなく、「媒体」との関係において作られるのだと考えるところだろう (ジラール 1-58)。

セジウィックはジラルールの欲望の三角形に関し、一つの問題点を指摘する。ジラルールの三角形において、「主体」と「対象」、「主体」と「媒体」の二辺が対称的であるのは、セクシュアリティを構成する感情の主観的、歴史的に決定される判断を抑圧しているからであり、本来的に対称的であるとは言えない。したがって、必然的にエロティックな三角形の構造にも修正が迫られるとする (Sedgwick, *Between Men* 22-3)。その前提に立ちセジウィックは、性愛の三角形におけるジェンダー・言語・階級・権力の歴史的な非対称性に注目し、男性同士のホモソーシャルな関係が、父系的な権力構造においていかに歪んだものとなってきたかを構造化して見せる。

構造化することにより見えてくるものがあるのも確かだが、ホモエロティックな欲望を表現しようとする欲望、そして、表現されたものにホモエロ



ティックな欲望を読み取りたい読者の存在を、結果としてその構造化が軽視する可能性があるかもしれない。私はむしろ、三角の関係を成す二つの辺の模倣が欲望を掻き立てるとするジラルの論点にもう一度戻って考えて見たい。従って、これから述べる *Bertram Cope's Year* の作品論において、私はセジウィックとは違い、ジェンダーの対象性にジラルのいう模倣が作用するという仮定を持ち込むことになる<sup>6)</sup>。その前提に立ち、*Bertram Cope's Year* に存在する様々なタイプの三角形をなす関係を見ていくと、ある三角形を別の三角形が支え、その連鎖によって作者/語り手のホモエロティックな視点が顕在化することを論じることができるのだ。

### 欲望の三角形とホモエロティックな視線

作品冒頭のパーティで、バートラムに最初に目をつけるのはメドーラ・フィリップス夫人である。先に紹介した若い男性を“intimately”に“know”したいと思うバジルの欲望が紹介された後、作者/語り手がこのように読者に語りかける。

Do you figure Basil Randolph, alongside his portière, as but the observer, the *raisonneur*, in this narrative? If so, you err. What!—you may ask,—a rival, a competitor? That more nearly.

It was Medora Phillips herself who, within a moment or two, inducted him into this role. (7)

ここで、バジルはメドーラによってライバル関係に持ち込まれることを確認したい。つまり、バジルのバートラムに対する欲望が、メドーラという存在によって顕在化する一つの三角形が存在する。作品の最終章、バートラムが大学町を去ったあと、バジルとメドーラが二人でコープの意味を考える場面でも語り手は二人を“reconciled competitors” (277) と述べており、作品の作者/語り手が二人のライバル関係を意図して作品に持ち込んでいるのは

明らかだ。しかし、このような反論も可能だろう。二人がコープをめぐるライバル関係になるからといって、二人のコープに対する欲望の中にエロティックなものを読み取る必要はない。そこで次に、作者が持ち込むもう一つの三角形を考えて見よう。その前に一つ確認しておきたいことがある。メドローはバートラムを“charming”と形容し続けるのだ。そしてその魅力は“coolness”と結びつき、“an icicle on the temple” (214) に喩えられる。バートラムの魅力は、冷たさ、近づきがたさにあると言っても良い。メドローは、バートラムの示すこの冷たさによって“charming”と思う気持ちが刺激され続けることになる。

もう一つの三角形に議論を移そう。その三角形とは、バートラムをめぐるメドローと三人の若い女性のそれぞれが形成する三角形である。まず初めはエイミーを含む三角形だ。彼女はバートラムを「尊敬の眼差しで」(90) 見つめ、メドローと同様、彼を“charming”(171) と思う。転覆したボートのエピソードを境に、彼女はコープを英雄視していく。理想化し、恋に落ち、婚約を既成事実として作り上げていくのである。つまり、エイミーの理想化作用によって、コープは結婚すべき理想の男となっていく。

フィリップス夫人は、エイミーたち若い女性をバートラムに引き合わせようとする中年女性的な態度を取る反面、彼女自身、彼を英雄視している。つまり、エイミーは手段に過ぎないのである。

Neither did he[Cope] welcome Mrs. Phillips' tendency to make him a hero. She was as willing as the girl herself to believe that he had kept Amy's chin above water—not for a moment merely, but through most of the transit to shore. He sat there uneasily, pressing his thumbs between his palms and his closed fingers and drawing up his feet crampingly within their shoes; yet it somewhat eases his tension to find that Medora Phillips was disposed to put Amy into a subordinate place: Amy had been but a means to an end. [...] (158, underline

mine)

エイミーの後、次々と彼に迫っていくホーテンスとキャロラインに関して、彼女たちは「自分の代理に過ぎない (but her delegates)」(225) とメドローラは考える。バートラムの目にはメドローラは結婚の対象と映らないが、メドローラ自身は彼を理想化しており、結婚へと向かう欲望を抱く若い女性が彼女の代理に過ぎないというのであれば、本来的にはメドローラもバートラムを結婚しうる対象として欲望していると見なすことができる。

冒頭で述べたように、ヴィクトリア朝的なモラルのもと、結婚は性愛が存在することをある意味で公に示すことのできる唯一の手段であったから、コープとの結婚を願う若い女性たちに、エロティシズムという欲望を一種の含みとして見出すことは可能だろう。となれば、フィリップス夫人も一人の女メドローラとして、バートラムにエロティックな意味を含めて欲望していたと見なしでも良い。

ここで整理すると、結婚を志向する若い女性と並列されることでメドローラのエロティックな欲望が暗示され、そのメドローラと“rival” “competitor” の位置に作者/語り手によって置かれるバジル・ランドルフも同様の欲望を抱いていることが、作者/語り手により暗示される。つまり、隠されたバジルのバートラムに対するホモエロティシズムが二つの三角形により暗示されるのだ。

ここまで確認してくると、バジルがバートラムに対して見せる様々な関心の意味が明確になる。バートラムへのバジルに対する好意にホモエロティックな含みがあることを前提とすれば、バートラムと知り合うとすぐに、ランドルフは彼の家族構成などプライベートなことを知ろうと大学の事務で書類をあさり、彼の住むアパートをこっそり見に行き、「もう一つ寝室」(102)を備えた広いアパートに引っ越すことの意味も明らかだろう。また、バジルとバートラムの二人が裸で湖で泳いだ後、結婚を迫る女性からいかに逃れるかをバジルが諭す場面 (76-77) は、エイミーとの婚約という事態に至るバート

ラムの意志の弱さを結果として暗示する一種の伏線として機能しているが、二人が裸で泳いだ後、「少なくとも形式的には儀式は完璧だった (the rite was complete)」(74) という言葉に後押しされるかのようにして交わされる会話であることを考慮にいと、結婚の忌避以上の意味を読み取ることも可能となる。

この作品には、今までに述べてきた以外の三角形も持ち込まれている。バートラムをめぐるランドルフとジョゼフのものであり、バートラムをめぐるランドルフとアーサーのものである。ジョゼフはバートラムが登場した当初、女ばかりの家に男の音がすることを快く思い、バートラムのことを「新しい光」(39) と考え、「彼の魅力 (his charms)」で家中あふれていたと思うのだ。しかし、フィリップス夫人が町の名士を集めコープのお披露目パーティを行った席上、バートラムが突然卒倒する事件がある。その報告を受けたジョゼフは「作られつつあった理想が消えてしまったかのようなようだった」(115) と思う。ジョゼフもバートラムを「理想」として「形成」し、彼を欲望していた。

バジルがバートラムに示す好意を知るのに反比例して、ジョゼフのバートラムへの気持ちは、好意から反感へと転換していくように思われる。ジョゼフはバジルとの関係においてバートラムと並置されていた。新しいアパートにバートラムとジョゼフをバジルは招待するが、バートラムは約束を忘れ、現れない。その晩、バートラムのために用意されていたかのように描かれる寝室に眠るのはジョゼフだが、ベッドサイドに置かれるのが「フォスターの杖」(176) であり、バートラムの「騎士の剣」(176) ではない。作者/語り手はバートラムとジョゼフを並置する。言ってみれば、二人はバジルをめぐるライバル関係に置かれるのである。ついでに言えば、バジルがバートラムのことを「騎士」に喩えているのは、メドーラがバートラムのことを、アーサー王伝説の騎士、“Sir Galahad” (40) と喩え、奉らんばかりの態度を示していたことに対応する。ここでも、一つの欲望の三角形が別の欲望の三角形を刺激する様子が見えてくる。

ジョゼフのバートラムに対する反感は、アーサーの登場によってより強まる。アーサーがバートラムに示す好意を感じ取ると、バートラムに寄せるバジルの関心は無駄であると諭そうとする。バートラムがアーサーといるとき、いかにくつろいでいたか、そして二人の様子が、旅行中に会った、「閨房の習慣を客間に持ち込んだ」と非難された「ある若い結婚したカップル」(200)のようであったかと説明する。バートラムとアーサーを、結婚している男女と喩えることにより関係の親密さを示した上で、バジルのバートラムへの関心に忠告を与えている。しかしそもそもジョゼフ自身、バートラムに関心を抱いていた。しかし、アーサーの出現にも関わらずバートラムに関心を示し続けるバジルに対し、最後には、バートラムはバジルには何の関心も示しておらず、関心を示しているのはアーサーだけであると、悲鳴に近い叫び声を挙げる。ジョゼフは明らかにバジルに好意を抱いている。

“Why do they care for him [Cope]?” he burst out. “He’s nothing in himself. And he cares nothing for them. And he cares nothing for you,” Foster added boldly. “All he has thought for is that fellow [Lemoyne] from up north. (234)”

「バートラムは空っぽだ (He’s nothing in himself)」という言葉は、後で述べるように意味深長である。今引用したジョゼフの言葉に対し、バジルはバートラムが「クールであり、利己的であり、無関心だ」(234)と述べ、そういった彼に対する気持ちは、子供が手を伸ばし“an icicle”をつかもうとしている姿に似ていると述べる。手に入らないからこそ魅力を感じるのであると開き直る。そしてバジルは、ジョゼフが嫉妬するためなお一層バートラムを欲望する。ついでに言うておけば、“an icicle”という言葉は、以前紹介したメドーラのバートラムに対する感情を示す際に用いられていた。

アーサーはこの作品の中では珍しく、外見的特徴がかなり詳細に、また直接的に描写される人物である。バートラムの姉の目を通して、次のように描

写されている。

Lemoyne presented himself to the combined family gaze as a young man of twenty-seven or so, with dark, limpid eyes, a good deal of dark, wavy hair, and limbs almost too plumply well-turned. In his hands the flesh minimized the prominence of joints and knuckles, and the fingers (especially the little fingers) displayed certain graceful, slightly affected movements of the kind which may cause a person to be credited—or taxed—with possessing the “artistic temperament.” To end with, he carried two inches of short black stubble under his nose. He was a type which one may admire—or not. (183)

「芸術家気質」とあるが、例えば Claude J. Summers は Willa Cather の “Paul’s Case: A Study in Temperament” (1905) を論じ、副題にある「気質 (temperament)」という言葉は “a code word for sexual orientation” (Summers 67) だと述べている。つまり、ホモセクシュアルと結びつく可能性がある。ダンディーな芸術家 Oscar Wilde の投獄に見られるように、ダンディズムと芸術家気質がソドミーとして表に出ると罪とみなされた。アーサーの示す小指の動きは明らかに女性的な仕草であり、その意味でも当時のダンディズムや、さらに言えば女性的なホモセクシュアル、当時の言葉で言えばフェアリー的な要素を示している。彼の描写は当時想像されうるホモセクシュアルの類型に当てはまるのだ。

そういったアーサーとバートラムの関係はというと、「私たちの家計」(98) という言葉が示すように経済を一つにしている暗示があり、メドーラも二人には “a complete unity of understanding and of sentiment” (193) や “a touch of passion” すらあると述べ、さらに肩に手を乗せるなど二人の肉体的接触も何度か語られている。このように、作品は二人の間の愛情関係を疑うことなく前提としているが、しかしその中に含まれるエロティックな要素

については、作者/語り手は直接には語らない。今までに分析してきた欲望の三角形がエロティックなものを暗示する役割を果たしている。この作品における三角形は、三角形の二辺を平行な関係と見なすことで男性同士の関係を結婚へと至る欲望と同じものとなす、一種の装置として機能している。ホーテンスが別れ際にバートラムに向かって口にした一言、「あんな自然に反した友情 (preposterous friendship) が続くわけがない」(243) の意味は実は一目瞭然ではあるが、作者・語り手は一目瞭然であることの真意、つまりホモエロティシズムを描く際には実に慎重かつ用意周到なのである。

こういった表現の仕方を選択したのは、おそらく作者が60歳を過ぎてからこの作品を世に問うたことと関係すると思われるが、それは作品の最後の場面と関わっている。

作品の最後の場面、メドーラとバジルが二人、バートラム・コープの魅力とはなんだったのかと語り合う場面、二人は住む世界が違うことを互いに確認するが、それに続き、作品はこんな風にして終わる。

“After all, he[Cope] was a ‘charming’ chap. Your own word, you know.”

“Yet scarcely worth the to-do we made over him,” said Medora, willing to save her face.

Randolph shrugged in turn, and threw out his hands in a gesture which she had never known him to employ before.

“Worth the to-do? Who is?” (288)

最後のランドルフの言葉、「大騒ぎに値するかって？誰が？」は、ここでは、もちろんバートラムが大騒ぎに値すると読める。さらに注意すべきは、「メドーラが今までにそんなしぐさをするとは思ってもいなかった仕草でランドルフは手を突き出した」とあることだ。これは何か。

作品はこれ以上語らないが、この場面の直前、キャロライン宛てにバート

ラムから来た手紙をメドーラが読み、バートラムはアーサーと別れたのだとメドーラが解釈しているのに対し、バジルはバートラムが次に書いてくる手紙を想像し、アーサーとの関係が継続する可能性を提示する (287)。そもそもバートラムはドクター論文を書きたいと思っていた。しかし、どうやらホモセクシュアルとして、アーサーは追い出されるように町から去らねばならなくなった。バートラムはその後を追うように、そそくさと簡単な論文を仕上げ、ドクターに進むことなく町を去る。それを考えれば、作者/語り手はバジルの推論の側に立っていると考えられる<sup>7)</sup>。そしてバジルがこのように類推するのは、バジルは二人の関係の継続を望んでいるからではないか。とすれば、最後でバジルが示す今までしなかった仕草とは、自分のホモセクシュアリティを明白に示す、アーサーが示していたような仕草、つまり、女性的な仕草と取れないか。さらにその前提に立てば、二人の関係に触発されたバジルが、最終的には自分が男性を愛することを素直に認め、それを認めた生き方をしていく決心をしたとまで読めないだろうか。

作品冒頭で、メドーラとのライバル関係にバジルが引き込まれることを告げる際、作者/語り手がこんなことを記しているのを紹介した。バジルは“the observer, the *raisonneur*” (7) だろうか、いや、それは間違いである。では“a *rival*, a competitor” か。“That more nearly” である。観察者、説明役であったバジルがライバルとして三角形に引き入れられた。そしてさらにそれ以上のものとなるとすれば、それは彼自身が行動を起こす以外に考えられないだろう。

以上、この作品に見られる欲望の三角形とその意味を分析してきた。要約すると、一つ目の三角形は、ジラールに倣えば、バジルを主体、バートラムを対象、メドーラを媒体とする三角形だ。もう一つの三角形は、メドーラが主体、バートラムを対象、そしてエイミーが媒体となる三角形である。ジラールが言うように、それぞれの三角形においては、媒体と対象の関係を模倣することにより、主体と対象との関係が成立する。例えば、エイミーの



バートラムへの欲望を模倣することにより、メドーラのバートラムへの欲望が顕在化する。しかしここで注意しなければならないが、この作品においては、対象を頂点とし、主体と媒体から対象へと結ばれる二辺が平行な関係となることで、一方の辺が、もう一辺の方に含まれるものを暗示する点である。それ故にこそ、二番目の三角形と最初の三角形でメドーラとバートラムを結ぶ一辺が共有されることになり、二番目の三角形における結婚へとつながるエロティックな欲望が、最初の三角形におけるホモエロティックな欲望を照らし出す。つまり、結婚につながるエロティックな欲望を出発点とし、類推によりそれぞれの辺に含まれる意味が顕在化し、隠れていたホモエロティックな視線が見えてくる。

バートラムをめぐるバジルとジョゼフの三角形では、三角形の三辺が交換可能だ。主体と対象、そして媒体の関係が入り乱れ、媒体バジルの対象バートラムへの欲望との類推で、今度は主体ジョゼフのバジルへの欲望が顕在化する。前に述べたように、バートラムとジョゼフは並置されており、欲望する主体と思われたバジルが、この三角形では欲望される対象となるのである。要するに、この作品において欲望の三角形は、結婚と並置されることでホモエロティシズムを暗示する装置となり、さらに暗示されたホモエロティシズムの視線をお互いに触発する装置として機能していると言えるのではないだろうか。

最終章直前、メドーラとバジルがバートラムの卒業式に出席するかどうかを話しているとき、メドーラがバートラムの“A farewell performance” (277) なのだから、行かなければと言うその直前、作者/語り手が“He the actor; they the audience” (277) と言葉を挟む。実はこの作品において「役者」であるのはアーサーではなくバートラムだ。そう言えば、盗賊から女性たちを守ったとされる事件のときにも、はだけた彼の姿をメドーラに見られていた。また、ホーテンスは彼の絵を見つめ、彼を描く (240)。さらに湖の場面、岸辺から裸で泳ぐ彼の姿をバジルが見つめていた。また、作者/語り手は、バジルとアーサーが初めて会う場面、お互いがお互いの情報を仕入れる

様子を描写する際、“through Cope”という言葉が三度も繰り返す(229-30)。欲望される対象と思われていたバートラム・コープは、登場人物の目から見れば見られるべきもの、役者であり、作者/語り手の目からは、実は演じる役によって他の登場人物の心を照らし出す媒体と見なされていたと言えないだろうか。すでに引用したように、ジョゼフはバジルに“He’s nothing in himself”と言うが、作者/語り手は、主人公バートラム・コープをそのような人物に設定した。それにより、最終的にはバジルの、そしてジョゼフのホモエロティシズムが浮かび上がる。

ホモセクシュアルとして町を追い出されたアーサーの後を追ひ、バートラムは博士号取得の願いを捨てこの町を後にする。アーサーのように表に自分のセクシュアリティを示すことには社会の制裁が加わるが、しかし、男性二人の間の愛情に制裁を加えようとする社会があるとしても、またそういった愛情を世間がどのように見ようとも、愛情を全うして生きようとする者が存在する。そして、その二人に刺激される形でバジルの一種の決心が示されるとすれば、それは単にバジルの決心を示すだけでなく、表に出ることに対し制裁を加える社会への、ある種の愛情に偏見を持つ社会への、ささやかではあっても確かな作者の批判ととることもできるだろう。そんな風に考えると、この作品は、様々な暗示装置により作者のホモエロティックな視線を表明する作品であると考えることができ、作家として最後の冒険を試み、この作品を自費出版という形をとってまで出版しようとした作者フラーの決死の気持ちも理解できる。

「言葉は」と言いかけたバジルの言葉に、ジョゼフは「思考を隠すために作られた」と続けている(270)。ヴァン・ヴェクテンがこの作品を評し、“Once its intention is grasped, however, it becomes one of the most brilliant and glowingly successful of this author’s brief series of works”と言ったことはすでに述べた。この作品に描かれる男女の愛情関係は「思考を隠すための」「言葉」なのである。それ故、ヴァン・ヴェクテンが言うように、ホモエロティックな作者の視線という意図は、様々な意匠により隠されている

が、一旦その意図をつかむことができれば、ホモエロティックな視線を肯定する作者の意図がたくみに描かれた作品として評価できるであろう。

### エロティックな三角形の可能性—終わりにかえて—

*Gaiety Transfigured: Gay Self-Representation in American Literature* (1991) を書いた David Bergman は、ゲイであるという感覚が文学的な表現に大いに依拠することを出発点としている (Bergman 5-9)。また、*Dayneford's Library: American Homosexual Writing, 1900-1913* (1995) で、20 世紀初頭のゲイ文学をタイプ分けして系譜を論じる James Gifford も、多少ともバーグマンと出発点を共有する (Gifford 1-2)。公に表現することができない欲望を表現しようとする作者が、密かにそういった欲望を表現する先駆的作品を求めてきたのだ。その意味で、ホモエロティシズムを表現しようとする作者の欲望を、そういった欲望を描くテキスト同士の関係から論じることにも可能であろう。フラーに即して言い換えれば、フラーがモデルとした可能性を持つ作品が存在し、また、モデルとしたことを論じることにより、その作品を別の面から読むことが可能になる作品が存在するということだ。本論の最後に、今述べた意味での先行作品をいくつか挙げておこう。

最初に紹介したいのは、イギリスからアメリカに渡り、音楽評や劇評を雑誌に書いていた Alfred J. Cohen が、Allan Dale という筆名で出版した “A Marriage below Zero” (1889) である<sup>8)</sup>。この作品は、“Damon and Pythias” (94) と称される二人の男性の片割れと結婚し、その結婚に失敗するが、失敗の理由が最後になるまで理解できない女性の視点から描かれる物語である。

“Damon and Pythias” とはギリシャ神話に基づく無二の親友を意味する言葉で、同性間の強い愛情を示すときに用いられてきている。また、ニューヨークでソドムとゴモラの話を書く場面があるが、これはソドミーの暗示である。そういう形で、同性愛が作品に持ち込まれている。そしてこの作品にも三角形が存在する。主体である妻は媒体である男を通して対象への欲望を募らせていくわけだが、そのことは逆に、二人の男性同士の間のホモエロ

ティシズムを強烈に暗示する仕掛けとなっている。

そもそも夫となった男性は偽装結婚を画策したわけだが、その結果、彼は本来属する社会からはじき出される。いや、自ら外れる道を選ぶ。しかし、男性二人の関係に気づかず、社会的には被害者となる女性を視点とすることにより、最終的には片割れの男と心中のようにして自殺するしかない男への同情を、また、ホモエロティックな欲望を持つ者にはそういった道しか用意されない社会への憤りを、作者はうまく隠して描いている。すなわち、この物語でも、結婚が三角形と結びつき、ホモエロティックに向けられる作者の視線を示していることになる。

次に、一時は詩人として、また旅行記作家としてかなりの評価を得ていた、Bayard Taylor の “Twin-Love” (1872) を紹介しよう。この作品も、結婚とホモエロティックな三角形を考える際、とても興味深い<sup>9)</sup>。なぜならば、双子の間の愛情関係に、片割れの女性との結婚、そして子供の誕生を通し、セクシュアルとまでは言えなくても性的なニュアンスが持ち込まれうる可能性を示しているからだ。

David and Jonathan という、聖書に基づく無二の親友を示す言葉が双子の名前に用いられていることに注目しよう。この物語でも、双子と女性との三角形が存在し、双子の片割れと女性との結婚が、特に残された子供を媒介に双子の関係を照らし出す<sup>10)</sup>。

最後に、今までの議論が、Henry James の *The Bostonians* (1886) につながる可能性を述べておきたい。この物語は結婚に終わる物語であるが、結婚する女性ともう一人の女性の関係には従来からレズビアニズムが指摘されてきた。また、フラーは作家修行中、ジェイムズに傾倒していた時期があり、*Bertram Cope's Year* には *The Bostonians* を意識していたことを示すところがある。結婚とホモエロティックな三角形の結びつきをこの作品で示すことができれば、フラーがジェイムズの作品にホモエロティシズムの発露を見ていた可能性と、別の側面からの *The Bostonians* の読みの可能性を提出できるのではないか。

*The Bostonians* の中心的プロットは、ボストンの裕福な家に生まれた女権運動家 Olive Chancellor と南部から出てきた保守的な男性 Basil Ransom の二人が、貧しい家に生まれながらも演説の才能に恵まれた、若く魅力的な女性 Verena Tarrant を奪い合う三角関係である。最終的にはバジルが勝利し、ベリーナとの結婚が暗示されるが、そこには幸せな結婚が暗示されていない。このプロットで、三角形が持ち込まれていること、不幸な結婚の暗示に注意したい。なぜなら、男女の結婚を単純に賛美する視点から作者が作品を描いていないと考えることができるからだ、さらに言えば、別の読み方の可能性を作者が暗示していると解釈できるからだ。そこには三角形が関係している。

ホモエロティシズムを明白に暗示する要素を指摘するのは難しい。しかし、オリーブとバジルの類似が強調されていることは明らかであり、オリーブとベリーナ、バジルとベリーナの関係は平行なものとして描かれている。それ故、バジルとベリーナの、最終的には結婚に向かう関係に潜むエロティックな要素は、オリーブとベリーナの関係にも反映され暗示されることになる。その意味で、今まで述べてきたホモエロティックな三角形をこの作品に適用することが可能である。

フラーは明らかに *The Bostonians* を意識していた。一つは *The Bostonians* の男性主人公の名前が Basil Ransom であり、*Bertram Cope's Year* に登場したバートラムを恋する男性の名前が Basil Randolph であったこと。もう一つは、オリーブが少女に対して抱く欲望が、“know intimately” (James 31) と、*Bertram Cope's Year* で、バジルが男子大学生に対して抱く際に用いられたのと同じ言葉が用いられていることである。フラーが、彼のホモエロティックな視線の延長線上に *The Bostonians* を見ていた可能性は否定できない。

*Bertram Cope's Year* の中に、バートラムという名前を、フラーが Shakespeare の *All's Well That Ends Well* から借用していることを、明らかにする箇所がある。*All's Well That Ends Well* は、結婚をめぐる喜劇で、主人公

Bertram は結婚を迫る女性を何とか退けたいと逃げ回るが、しかし彼女の知恵に負け、結婚させられる話だ。*All's Well That Ends Well* の主人公の名前を、フラーが自分の作品の主人公に採用した理由は明らかだ。迫られる結婚から何とかして逃れる主人公の造形である。ただし、ここには、結婚を逃れるとはどういうことを意味しうるかという問いが隠されている。結婚を迫る社会がある以上、逆に結婚を一つの隠れ蓑にして隠された欲望を表現しようとする欲望も存在する。今回、*Bertram Cope's Year* 以外の作品を綿密に論じる余裕はなかった。しかしジェイムズの *The Bostonians* をホモエロティックな観点から論じる傾向は、最近ますます盛んである<sup>11)</sup>。本論で論じた結婚とエロティックな三角形によるホモエロティシズムの暗示を、さらに系統だって今後も見ていきたい。

#### 註

本論は、2003 年 1 月 25 日の日本アメリカ文学会東京支部月例会での口頭発表に基づいている。

- 1) George Chauncey は第二次大戦前の世界を指して、“it was not a world in which men were divided into ‘homosexuals’ and ‘heterosexuals’” (Chauncey 12) と述べている。
- 2) “a middle-aged bachelor” バジル・ランドルフが視点的人物だと考える人もいる (Austen 28)。1998 年版のテキストに後書きを書いた Andrew Solomon は、“The most articulate voice in the novel belongs to Joe Foster” (Solomon 294) と述べる。また、バートラムをこの大学町での様々な人間関係に引き入れた未亡人、Medora Phillips の目から見ていと読める箇所もあり、混乱した印象を与えるのは事実だ。
- 3) Edmund Wilson はこの作品は “Fuller’s best” (Qtd. in Solomon 298) と褒め称え、この作品には、“a kind of philosophic theme which seems to me to raise it well above the fiction of social surfaces of the school of William Dean Howells” (Qtd. in Scambray 9) があるとまで言う。
- 4) Solomon は “The novel treads gently around the edge of the erotic” (Solomon 291) と述べている。
- 5) この点に関しては James Levin も指摘している (Levin 15)。
- 6) セジウィックが *Epistemology of the Closet* (1990) で展開する *Billy Budd* 論を批判して、Caleb Crain は次のように述べる。

Most gay readings depend in part on a sentimental identification with the text. Readers sense, more strongly than with other texts, that

Melville is talking about someone like them. The readings are therefore vulnerable to disparagement as emotional impressions rather than critical facts. [...] By repackaging it as an epistemology, Sedgwick moves gay reading to what seems to be higher, safer ground. (Crain 244)

- 7) ちなみに、フラーの同性愛を前提に伝記を書いた Kenneth Scrambray は、作品の結末は二人の別れを示していると解釈している (Scrambray 151)。
- 8) 2002 年、*College Literature* に、時代背景からこの作品を論じる論文が発表された (Kaye 50-79)。
- 9) 作品自体は 1860 年代に執筆されており、Austen が、“male friendship” を称揚した 19 世紀小説とする *Joseph and His Friend* (1870) に先立って書かれている。Wermuth は、“it is a trying-out of the material of *Joseph and His Friend*, for it constantly skirts the edge of suggestive sexuality” (Wermuth 100) と位置づけている。*Joseph and His Friend* に関しては以前、私自身も論文に書いたことがあり、今回のテーマとの関連でも興味深い作品であるが、しかし、結婚と三角形の結びつきを考えると、この短編のほうがわかりやすい構造を持っている (本合 127-45)。
- 10) もちろん双子という設定である以上、そこにホモエロティックな要素を見るのは難しいかもしれないが、このような意見もある。  
The theme of two brothers in love was used often by Taylor, e.g., in his extraordinary story, “Twin-Love.” The use of brothers appears to be a dodge, allowing for an expression of affection which would otherwise be unthinkable. Note in particular that the brothers in the story are called David and Jonathan! (Martin 101)
- 11) 代表的なものを挙げておけば、Faderman (309-32), Leer (93-109), Jagose (57-76) など。

## 引用文献

- Austen, Roger. *Playing the Game: The Homosexual Novel in America*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1977.
- Bergman, David. *Gaiety Transfigured: Gay Self-Representation in American Literature*. Madison, Wis.: U of Wisconsin P, 1991.
- Brown, Jr., Bernard R. *Henry Blake Fuller of Chicago: The Ordeal of a Genteel Realist in Ungenteel America*. Westport: Greenwood, 1974.
- Chauncey, George. *Gay New York: Gender, Urban Culture, and the Making of the Gay Male World, 1890-1940*. New York: BasicBooks, 1994.
- Conarroe, Joel. “Seven Types of Ambiguity.” *The New York Times Book Review*. August 9, 1998: 13.
- Crain, Caleb. *American Sympathy: Men, Friendship, and Literature in the New Nation*. New Haven: Yale UP, 1894.
- Dale, Allan. “A Marriage below Zero.” *Pages Passed from Hand to Hand: The Hidden Tradition of Homosexual Literature in English from 1748 to 1914*. Ed. Mark Mitchell & David Leavitt. Boston: Houghton, 1997.
- D’Emilio, John & Estelle B. Freedman. *Intimate Matters: A History of Sexuality in America*. New York: Harper, 1988.

- Faderman, Lillian. "Female Same-Sex Relationships in Novels by Longfellow, Holmes, and James." *The New England Quarterly*. 1.3 (1978): 309-32.
- Fuller, Henry Blake. *The Cliff-Dwellers: A Novel*. New York: Harper, 1893.
- . *Bertram Cope's Year*. 1919. New York: Turtle Point, 1998.
- Gifford, James. *Dayneford's Library: American Homosexual Writing 1900-1913*. Amherst: U of Massachusetts P, 1995.
- Hogan, Steve & Lee Hudson. *Completely Queer: The Gay and Lesbian Encyclopedia*. New York: Henry Holt, 1998.
- James, Henry. *The Bostonians*. 1886. London: Everyman, 1994.
- Jagose, Annamarie. "Unmarriageable: The Housing of Sexual Cultures in The Bostonians." *Inconsequence: Lesbian Representation and the Logic of Sexual Sequence*. Ithaca: Cornell UP, 2002. 57-76.
- Kaye, Richard A. "The Return of Damon and Pythias: Alan Dale's *A Marriage below Zero*, Victorian Melodrama, and the Emergence of a Literature of Homosexual Representation." *College Literature* 29.2 (2002): 50-79.
- Leer, David Van. "A World of Female Friendship: *The Bostonians*." *Henry James and Homo-Erotic Desire*. Ed. John R. Bradley. London: Macmillan, 1999. 93-109.
- Martin, Robert. *The Homosexual Tradition in American Poetry*. Austin: U of Texas P, 1979.
- Miller, Neil. *Out of the Past: Gay and Lesbian History from 1869 to the Present*. New York: Vintage, 1995.
- Pilkington, Jr., John. *Henry Blake Fuller*. New York: Twayne, 1970.
- Scambray, Kenneth. *A Varied Harvest: The Life and Works of Henry Blake Fuller*. Pittsburgh: U of Pittsburgh P, 1987.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- . *Epistemology of the Closet*. Berkeley: U of California P, 1990.
- Summers, Claude J. *Gay Fictions Wilde to Stonewall: Studies in a Male Homosexual Literary Tradition*. New York: Ungar, 1990.
- Taylor, Bayard. "Twin-Love." *Beauty and the Beast and Tales of Home*. 1872. New York: Garret, 1969.
- Wermuth, Paul C. *Bayard Taylor*. New York: Twayne, 1973.
- ジラール, ルネ. 『欲望の現象学—ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実』. 1961. 古田幸男訳. 東京: 法政大学出版局, 1985.
- 本合 陽. 「マンリィ・ラブの二つの顔—『ジョゼフと友達』における戦略的欺瞞」静岡大学人文学部人文論集 50.2 (2000): 127-45.